The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『通俗西湖佳話』の翻訳方法について
Author(s)	金, 昌哲
Citation	語文. 2010, 95, p. 23-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69160
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『通俗西湖佳話』の翻訳方法について

金　昌　哲

はじめに

文化二（一八〇五）年に刊行された『通俗西湖佳話』は、江戸時代に勃興し発展した唐話学と通俗物の流行という流れの中で生まれた、清の墨浪子編纂による『西湖佳話』十六話のうち、五話を翻訳したもの。諸本として『国書総目録』は、「国会・静嘉・愛知学芸・京大潁原・阪大・広島大・米沢興譲・大橋」を挙げ、その他に、東京大学東洋学研究所、関西大学附属図書館、愛知教育大学附属図書館にも刊本が所蔵されている。また『近世白話小説翻訳集』に長澤規矩也氏旧蔵本の影印と中村幸彦氏の解題が備わる。(1)

享保頃より唐話の流行が盛んになり、これをきっかけとして中国白話小説への関心も次第に高まる。『舶載書目』(2)を見れば元禄から宝暦までの白話小説の渡来の状況を窺うことができる。日本の読み物とは異なる、面白いストーリーの展開や、情緒豊かな浪漫的な発想により忽ち歓迎を受けることとなり、その結果、中国の白話小説を翻訳したもの―通俗物が誕生したのである。この通俗物は白話小説の翻訳ものとして、いずれもその原典が特定されること、漢文にほぼ忠実な翻訳文であること、表記は漢字片仮名混じり文であること、漢字には多く振り仮名を付されていることなどが共通している。それゆえ、「通俗物」は漢籍を十分読めない人達も含め広く読まれることとなった。読者は、当時の日本の読み物よりはストーリー性が上位にある「通俗物」で文学心を養い、小説観を高めた。そして「通俗物」における翻訳の手法は読本の発生を促したとされる。(3)

『通俗西湖佳話』はこのような白話受容の背景で生まれたが、作品自体については、まだ十分に研究が行われていない。訳者の問題、原拠である『西湖佳話』の諸本の整理、依拠テキストの検討や翻訳方法等において、研究の余地が残されている。

一　訳者について

『通俗西湖佳話』の訳者を『国書総目録』及び『日本古典文学大辞典』（徳田武氏執筆）は、十時梅厓（崖）とする。しかし実際には、文化二年版本に「梅厓訳」という文字は見出されない。ただし、「浪華　梅厓」と署名されている序文があり、序文を梅厓が書いたことは明らかである。この序文は『通俗西湖佳話』の成立を考える上で重要な手がかりであるため、全文を掲載する。(4)

通俗西湖佳話序

余曾邂逅西湖之人于崎港、粗聞其概略、言是大都類于崎嶺景勝其周環不過数里、而凡可観可遊者悉備焉、於是乎騒人詞客、水陸之行、四時之科、採手此者天下為最況、雨奇晴好淡妝濃抹彼以媚我乎、享和癸亥之小春、余偶滞于尾之名府、旅邸蕭索乃書肆某呈此巻、乞序景図、余近撰文衡山真跡、西湖図頗貯、其状于胸次、因與向所聞于華客、参合遂作小図而與之、若夫世之同好者穫観之、則臥游之樂不出于尸遅而有餘矣、且佳話之以國字而解也、能使人々一見昂領奚、待余一賛而後行也哉

題于客舎寒窓之下

浪華　梅厓印

この序文から、梅厓が享和三年十月に名古屋で、書肆の求めに応じて、本書の「序景図」を書いたことが分かる。

ところで、中村幸彦氏は本書の訳者について次のように指摘している。(5)

本書の訳者は、従来十時梅厓とする書目が多いが、本書巻頭の梅厓の序を見ると、享和癸亥の小春、名古屋を訪れた折に、白拌某なる人物よりこの書を示され、序と景図を乞われたとあることにより、実際の訳者は名古屋に住む白拌某という人物であることが判るが、この人物の伝記は詳らかにしない。また、序中に「某」と呼ばれる様に、その人物自身大して有名な人物でなかったらしいし、出版に際し、責任の持てる立場にいる様な人物でもなかったらしい。その上、梅厓自身、本書が出版された文化二年には、既に没していたので、さらに、訳者について知ることを困難にしている。（傍線、金。以下同様。）

また中村幸彦氏よりも早く丸山季夫氏も、訳者について次のように述べていた。(6)

通俗西湖佳話四巻が、十時梅厓の著書の一つであると云はれて居たかと思ふ。然し、此は其の序文に、享和三年の春、尾の名府の旅中、書肆某の乞に依って、序圖を作ると自ら記して居る。（略）梅厓の序文を信ずれば、梅厓は長崎の風景を大いに似たる所あると近撰の西湖の圖を得て、此に依って、小圖を書いたのみである。此西湖佳話の譯者は、すぐ梅厓とするのはどうであらうか。（傍線金）

中村幸彦氏は該当箇所を「白拌某」、丸山季夫氏は「書肆某」と判読するが、次に挙げる影印によると、「書肆某」と読める。

web公開に際し、
画像は省略しました

『通俗西湖佳話』序一丁裏（部分）
（『近世白話小説翻訳集』第五集）

この書肆は刊記に名のある尾張の板元永楽屋東四郎のことであろう。梅厓は永楽屋東四郎の求めに応じて、序と景図を書いたのである。この序文から訳者を確定することは難しいが、恐らく名古屋と地縁のある人物であると推定することはできよう。

梅厓自身は、名古屋周辺において富裕な商人である内田蘭渚や一番の本屋永楽屋との文化的交流があった。梅厓と蘭渚との交友のうち確認できる最も早いものは、寛政七年（一七九五）に名古屋で行われた書画会『蓬瀛勝会』である。その後、寛政九年（一七九七）に梅厓は蘭渚等の依頼を受け『国朝画徴禄』の題言を書いている。『名家書簡集』五の中に収められている蘭渚宛ての梅厓書簡二十二通をみれば、この経緯をうかがうことができる。[7] 同じく蘭渚宛ての書簡には永楽屋の事にもふれている。書簡八（三月二十六日付）に「尚々、風月頼之品は是非六月之間に相認差下し可申候、其節何分宜奉願候、永楽屋より横本書私之板下時々頼来候、是も同時に相認候積に御座候、其外庭訓一所に下し申候段、乍憚宜御申通可被下候」と記している。「風月頼之品」は恐らく梅厓筆手本類で、永楽屋で出版している『早速千字文』を指している。[8] 梅厓は蘭渚を通じて、永楽屋と風月堂との連絡を依頼していることが分かる。このように梅厓は名古屋の本屋永楽屋との接点を持っていたのである。

二　通俗西湖佳話の依拠テキスト

『通俗西湖佳話』の翻訳方法を検討する前に、まず翻訳する際に使われていたと思われるテキストの確定を行いたい。依拠テキストとの比較を通じてこそ翻訳の在り方を知ることができよう。

大塚秀高氏[9]によると、『西湖佳話』は以下の諸本に纏めることができる（筆者所見の所蔵先を記しておく）。

① 金陵王衙蔵板→康熙十二（一六七三）年序（大阪大学文学部懐徳堂文庫）
② 翰海楼蔵板→乾隆十五（一七五〇）年序（京都大学文学部）
③ 金閶学耕堂蔵板→乾隆十五年序（京都大学人文科学研究所）
④ 会敬堂蔵板→乾隆十五年序（大連図書館・大谷文庫）
⑤ 大文堂蔵本→乾隆五十一（一七八六）年序（広島大学文学部）
⑥ 金閶緑蔭堂刊本→哈仏大学哈仏燕京学社漢和図書館（未見）
⑦ 海陵軒蔵板→乾隆五十一年序（天理大学附属天理図書館）
⑧ 芥子園珍蔵→乾隆五十一年序（大阪大学附属図書館・懐徳堂文庫）

⑨ 荷香小樹刊本→乾隆五十一年（国会図書館）
⑩ 連元閣蔵板→同治九（一八七〇）年
⑪ 味経堂蔵板→同治九年
⑫ 武林三益堂蔵板→同治九年
⑬ 大興堂刊本→嘉慶二十二（一八一七）年

以上の諸本は大体序文成立時期や刊年から分類することができる。康熙十二年序（①）、乾隆十五年序（②③④）、乾隆五十一序（⑤⑥⑦⑧⑨）、同治九年刊（⑩⑪⑫）、嘉慶二十二刊（⑬）。前掲の諸本から『通俗西湖佳話』が刊行された文化二年より後に刊行された⑩から⑬までの版本は調査対象から除外する。残る⑥哈仏大学哈仏燕京学社漢和図書館の金閶緑蔭堂本は未見で、その他の諸本と『通俗西湖佳話』とで本文の比較を行う。比較対象は固有名詞と詩句を中心に、本文に異同の見られる箇所について、【表1】にまとめ、異同が無い箇所は○で示した。なお、便宜上諸本を「金陵王衙本」「翰海楼本」「金閶学耕堂本」「会敬堂本」「大文堂本」「海陵軒本」「芥子園本」「荷香小樹本」と省略する。

【表一】から『通俗西湖佳話』と語句が一致するのは「金閶学耕堂本」であることがわかる。なお、【表一】のうち葛洪の没年を示す「八十四歳」の箇所について、中村幸彦氏は、『西湖佳話』の「八十一歳」を「誤訳」したものとしているが[10]、これは、金陵王衙本に依拠されたものと考えられる。

以上のように『通俗西湖佳話』と語句の異同のないのが、「金閶学耕堂本」であることは一目瞭然である。『通俗西湖佳話』は翻訳の際に使われていた依拠テキストは「金閶学耕堂本」の可能性が高いと判断し、『西湖佳話』の引用は京都大学人文科学研究所所蔵の「金閶学耕堂本」を使用する。

三　全篇にわたる翻訳態度

『通俗西湖佳話』と『西湖佳話』の詳細な比較を通じて、訳者の俗語理解の実態及び当時の唐話学の水準がいかなるものであるかを考えてみたい。

考察に入る前に通俗物全体の流れを概観しておこう。

江戸時代の通俗物は、長尾直茂氏によれば、前期と後期の二期に区分できる[11]。前期通俗物は元禄～享保（一六八八年～一七三五年）、後期通俗物は宝暦～天保（一七五一年～一八四三年）に刊行される作品群を指すとされる。

前期通俗物は多く『通俗〇〇軍談』という書名で刊行され、「通俗軍談書」とも呼ばれている。内容からも「軍書」に数えるのが通例である。後期通俗物として翻訳される白話小説は、儒教の倫理規範を遵守する忠臣、孝子、烈婦らが長幼の順を守るような作品が多く見られる。文化二年に刊行された『通俗西湖佳話』は刊行時期が後期に該当するため、後期通俗物に位置付けられる。

ただし、『通俗西湖佳話』は、これらの後期通俗物でよく見られる逐語訳とは違う翻訳態度を取っていることは、注目される。具体的な例として、『通俗西湖佳話』と成立年代が近い『通俗醒世恒言』（寛政元年序）『通俗平妖伝』（寛政十一刊）を取り上げ

【表一】『通俗西湖佳話』及び依拠本文との語句の異同表一覧

通俗西湖佳話	金陵王衙本	瀚海楼本	金閶学耕堂本	会敬堂本	大文堂本	海陵軒本	芥子園本	荷香小樹本
（巻一、一ウ）京陵句容	金陵句容	○	○	○	○	○	○	○
（巻一、八ウ）赤霞山	○	○	○	○	棲霞山	棲霞山	棲霞山	棲霞山
（巻一、十二ウ）八十四歳（葛洪）	八十一歳	○	○	○	○	○	○	○
（巻二、七ウ）英雄自是風雲客	英英自是風雲客	○	○	○	○	○	○	○
（巻三、二ウ）五百騎（宗澤の兵）	○	○	○	○	五百兵	五百兵	五百兵	五百兵
（巻三、十八ウ）天下中分隊不知	天下中分隊不支	○	○	○	○	○	○	○
（巻四、三オ）北客若来休問答	○	○	○	○	北客若来休問信	北客若来休問信	北客若来休問信	北客若来休問信
（巻四、五オ）二十柄（團風）	○	四十柄	○	四十柄	四十柄	四十柄	四十柄	四十柄
（巻四、六オ）十口無歸更累人	○	○	○	○	○	○	○	○
（巻四、六オ）他時夜雨獨傷神	○	○	○	○	○	○	他朝夜雨獨傷神	○
（巻四、十オ）老封怨捲蒼煙空	○	○	○	○	老封席捲蒼煙空	老封席捲蒼煙空	老封席捲蒼煙空	老封席捲蒼煙空
（巻四、十ウ）念佛（圓澤）	○	○	○	○	愈佛	愈佛	用兪	○

て、翻訳傾向を検証する。『通俗西湖佳話』『通俗醒世恒言』『通俗平妖伝』[12]は、ともに巻之一の部分を確認する。通俗物及び依拠本文の引用は、便宜上、振り仮名を省略し句読点を付した（以下同）。

まず『通俗西湖佳話』の巻之一を確認する。

葛嶺仙蹟

西湖ノ湖水ヲ取廻シテハ皆山ナリ。其中ニ手ヲ立タル如ク峻シク高キヲハ峰ト云。山ノ上ノドヤカニシテ平地多ク四方ヲ眺望スルトテ通行逍遙スルニモ辛ドカラヌヲ嶺ト云。湖上ノ南北ノ両峰ト左右ノ山々ノ間ニ嶺ト稱スル所ハ多ケレドモタヾ其方角又ハ形恰ヲ以テ取扱フノミニシテ名字ヲ付名ヲ得タル嶺ハアラズ。然ルニ保叔塔ヨリ西ヘ向テノ一帯ニ限リテコレヲ葛嶺ト云。其由来ヲ尋ルニ昔晋ノ代ニ葛洪ト云異人此嶺上ニテ修行シテ仙術ヲ成就シタルニ因テ其人ノ姓ヲ以テ嶺ノ姓トハシタルナリ。件ノ葛洪號ハ稚川京陵ノ句容ノ人テ其昔三国ノ時ニ左慈ト云者ニ仙術ヲ學ビ得テ白日ニ天ニ升リタル葛玄ト云仙人ノ孫ナリ。葛玄天ニ升ラントスル寸鄭思遠ト云弟子ニ仙家ノ秘書ヲ残ラズ授ケテ云ク、ワガ子孫ノ中ニ若コレヲ傳ヘツベキ者出来タラバ搆ヘテ隠スコトナカルベシトソ云ケル。サル人ノ血脈タル葛洪ナレトモ、父母ニハ早クハナレ、其上甚貧窮也。幸ト性質怡淡ニシテ世間ノ人ノ羨ミ願フ所好ム所ニ於テ一ツモ好ム所ナク、好ム事トテハ書物ヲ見ルコトノミナリケルニ書物ノナキニ困リテ詮方ナク山中ニ往テ柴薪ヲ刈市中ニ挑出シテ賣得タル銀錢ヲ以テ紙筆ヲ調ヘテ人ノ書籍ヲ借テハ抄取ヌ。且抄シ且讀テ寒暑ヲモ畏レズ凡十餘年ノ間此ノゴトクニシテ終ニ天晴ノ學者ニナリニケリ。

これに対し、『西湖佳話』（巻之一）は以下の通りである。

葛嶺仙蹟

西湖環繞皆山也。而山之蜿蜒起伏可容人之散步、而前後観覧者則嶺也。嶺之列在南北両峯、與左右諸山者、皆無足稱、縱有可稱、亦不過稱其形勢、稱其隅位而已、並未聞有著其姓者。獨保叔塔而西一帯、乃謂之葛嶺、此何説也。蓋嘗考之、此嶺在晋時曾有一異人葛洪在此嶺上、修煉成仙一時人傑地霊故人之姓、即冒而為嶺之姓也。你道這葛洪是誰、他號稚川原是京陵句容人。在三國時従左慈学道、得九丹金液仙経、白日冲擧的仙公葛玄、就是他之祖也。仙公昇天之日、曾将上清三洞、霊寶中盟詩品経籙一通授與弟子鄭思遠、囑以吾家門子孫若有可傳者萬勿秘。故此此葛洪出身、原是不凡。但父母早亡、其家甚貧。却喜他生来的性情恬淡、於世間的種種嗜欲皆不深戀、獨愛的是讀書向道。却又苦於無書可讀、只得到山中去伐些柴薪、挑到市上去賣、賣了銀錢、就買些紙筆回来、借人家的書来抄讀。且抄且讀、不畏寒暑、如此十数年、竟成了一個大儒。

両書を比較すると、語句の全く重なる部分は固有名詞が多く、それ以外の語句は、できるだけ、逐語訳を避けようとする試みが見られる。所謂書下し文ではなく、原文の意味を失わないようにしながらも、自然な和文体になるように工夫されている。この種

の翻訳方法は、言葉を変えずそのまま逐語訳するのに比べて、訳者の工夫と白話の力量と文章能力が試されるわけである。このことは次に挙げる『通俗醒世恒言』ならびに『通俗平妖伝』[12]の例を見れば明らかであろう。

小水灣夭狐詒書

昔在唐玄宗ノ時長安ニ王臣ト云者アリ。粗書ヲヨミ酒ヲ好ミ善劍ヲ擊馬ヲ走ス。挾彈ハ尤長スル所也。幼寸父ヲ喪タヾ母ノミ堂ニアリ。于氏ヲ娶テ妻トス。王臣ガ弟ニ王宰ト云者アリ。武藝ニ達シタル故、出テ羽林親衛ノ官トナル。未妻ヲ娶ラズ。此兄弟家頗富、童僕多アリテ、安居シテ業ヲ楽シカ、想サルニ安禄山カ兵亂起リ、玄宗皇帝蜀ヘ落サセタマヘハ王宰モ御駕ニ隨ヒテソ往ケル。王臣是非ナク房産ヲ弃、細軟ヲ收拾シ、母妻婢僕ヲ引ツレ難ヲ江東ニ避、遂ニ杭州ノ小水灣ト云所ニ住テ、田産ヲ買テ、世ヲ渡リシカ、後来京城昔ノ如ク、道路静ニナリシト聞テ、再都ニ往テ親知ヲ尋訪、舊業ヲ整理セント思ヒ、母親ニ別ヲナシ。一箇家人王福ト云者ヲ連、水路ヨリ行テ楊州ニソ至リケル。（『通俗醒世恒言』巻之一）

小水灣夭狐詒書

話説唐玄宗時、有一少年、姓王名臣、長安人氏、略知書史、粗通文墨、好飲酒、擊善劍、走馬挾彈、尤其所長。從幼喪父、惟母在堂。娶妻于氏、同胞兄弟王宰、臂力過人、武藝出衆、充羽林親衛、末有妻室。家頗富饒、童僕多人。一家正安居楽業、不想安禄山兵亂、滝関失守、天子西幸。王宰隨駕扈從、王臣料道立身不住、弃下房産、收拾細軟、引母妻婢僕、避難江南、遂家于杭州、地名小水灣、置買田産、經營過日。後来聞得京城克復、道路寧静、王臣思想要往都下尋訪親知、整理舊業、為歸郷之計。告知母親、卽日收拾行囊、直帯一个家人、喚做王福、別了母妻、聯水路直至楊州。（『醒世恒言』[13]第六巻）

授劍述處女下山　盗法書袁公歸洞

茲ニ春秋周ノ敬王ノ比、呉越戰ヲ交ヘ、呉王夫差越王句踐ヲ圍テ會稽山ニ困ム。句踐大夫種ヲツカハシテ、詞ヲ卑シ禮ヲ厚シ行テ、和ヲ請シムルニ、呉王許諾シ、句踐ヲユルシテ、將ニ冠服ヲ脱シメテ、呉國ノ為ニ馬ヲ養スコト三年、遂ニ始テ國ニ放チカヘス。越王一心ニ此讐ヲ報ント欲レドモ、想ニ呉國ニハ魚腸ノ劍三千アッテ、敵抵シガタシト案ジ、煩ケルガ時ニ范蠡計ヲ獻ジ六千ノ君子軍ヲ選ビ出シテ、朝夕ニ訓練シ居タリケル。茲ニ南山ニ一人ノ處女アリ。山ヲ下リ越王ノ軍ニ赴ク。半途ニヲイテ、一箇ノ白髪ノ老人ニ逢、自袁公ト稱ス。處女ニ向テ云、小娘子精ク劍術ニ通玉フト承ル。老漢モ粗一二ヲ知ル。願ハ請フコレヲ試ン。處女ガ云、妾敢テ隠ズ、タヾ老翁ノ試ル所ニ從ン。（『通俗平妖伝』巻之一）

授劍述處女下山　盗法書袁公歸洞

話説春秋周敬王時、呉越交争、呉王夫差、圍困越王勾踐於會稽山之上、虧得下大夫文種卑詞厚禮、去請行成、呉王依允、將越王夫婦摘去冠服、囚於石室之中、替呉國養馬三年、方始放回。越王一心要報此讐、想呉國有魚腸之劒三千、難以抵敵。有上大夫范蠡獻計、挑選六千君子軍、朝夕訓練。訪得南山有箇處女、精通劒術、奉越王之命、聘請他為教師。那處女収拾下山、行到半途、逢着一箇白髪老人、自稱袁公、對處女説道、聞小娘子精通劒術、老漢粗知一二、願請試之。處女道、妄不敢隠、但憑老翁所試。

（『三遂平妖傳』[14] 第一回）

『通俗醒世恒言』『通俗平妖伝』の翻訳は、そのほとんどが逐語訳であることが一目瞭然である。そのため、それぞれの本文と底本との語句の異同が少なくなっているのが、『通俗醒世恒言』『通俗平妖伝』の翻訳の特徴と言えよう。たとえば、引用箇所波線部のように、『通俗平妖伝』では「一个家人」を「一箇家人」と、『通俗醒世恒言』では「一箇白髪老人」を「一箇ノ白髪ノ老人」と訳しているのに対し、『通俗西湖佳話』では、「一個大儒」を「天晴ノ學者」と訳している。

『通俗西湖佳話』『通俗平妖伝』『通俗醒世恒言』の各訳文と底本とを比較すると、『通俗平妖伝』『通俗醒世恒言』は、底本を直接書き下した部分が多く、原典の内容をそのまま伝えている所が目立つ。一方、『通俗西湖佳話』の場合は、原文に対応する語彙は固有名詞以外は見出し得ない場合が多い。『通俗西湖佳話』の翻訳は逐語訳を避けて、和文の体裁を整えるように工夫されている。

四　翻訳方法の詳細

『通俗西湖佳話』と刊行時期が近い他の通俗物との翻訳方法の相違について、以下、詳細にその翻訳方法について検討する。

四・一　訳者の意図、工夫が見られる翻訳

（1）葛洪が山の緑のなか、うきうきとした気分で「此色は山につきたるにもあらず又山を離るゝにもあらず」と詠み、この喩えを引用する場面（巻之一、二ウ）

則此色又不復有、因而感悟道孟夫子所言、睟於面盎於背正是此種道理

（『西湖佳話』）

カノ徳アレハ身ヲ潤スト云道理モカクヤアランカナンド心ヲ澄シ居タルニ

（『通俗西湖佳話』）

『西湖佳話』にある「孟夫子所言睟於面盎於背」は、『孟子』（盡心上）の「君子の性とする所は、仁義禮智、心に根ざす。其の色に生ずるや、睟然として面に見はれ、背盎れに、四體に施き、四體言はずして而して喩る」の引用の一部である。「四體言はずして而して喩る」の意味は、徳ある人の四体は物を言わないが、徳がおのずから外にあらわれて、見る人をして徳のある人だということをさとらせるとある。[15] 訳者はこのような語句を翻訳する際、単なる書き下しでは済ませず、『孟子』の言葉を正確に理解した

上で、「孟夫子所言睟於面盎於背」を「カノ徳アレハ身ヲ潤ス」と翻訳している。また「徳アレハ」と翻訳したのは分かりやすさを狙ってのことだけではないと思われる。葛洪は仙人になる素質を持っている人物であり、そうした人物の性格とも一致して矛盾がない翻訳になっているのである。

(2) 互いにずっと別れず朋友になろうという契りを結んだ圓澤と李源であるが、圓澤がある婦人の子供に生まれ変わる事を余儀なくされてしまう。そこで二人は十三年後に逢う約束をする。そしてついに十三歳になった圓澤が約束を果たした時の詩（巻之四、十六ウ）

三生石上舊精魂　賞月臨風不要論
慚愧情人遠相訪　此身雖異性常存　（『西湖佳話』）

三生石上舊精魂　賞月臨風不要論
慚愧良朋遠相訪　此身雖異性常存　（『通俗西湖佳話』）

訳者は底本の「情人」を「良朋」に書き直している。ここでは、原話の、朋友の友情を巡る「三生石蹟」の物語を正確に伝えようとする訳者の意図が働いていると思われる。他の部分を見ると、基本的には詩はそのまま書き写しているが、ここでは、訳者は本文の内容を踏まえて、深く考えていることがうかがえよう。

(3) 葛洪の所に客が来て、葛洪が仙術を発揮する場面（巻之一、十一ウ）

毎遇天寒客至、洪便道、貧居泛火奈何、因而口中吐出熱氣来、滿座皆煖盛暑客到洪又道、哇居苦熱奈何、因口中噓出冷氣来一室皆涼　（『西湖佳話』）

葛洪ガ所ヘ寒中ニ客来レバイハク貧家ニハ爐火ノモテナシモ得セズトテ口中ヨリホット一口吐出ス息ニテ一座アタヽカニシテ春ノ如シ又暑中ニ客来レハ云クカヽル小屋ニハ熱氣タヘガタシトテ口中ヨリフツト吹出ス息ニテ座中スヾシウシテ秋ノ如シ　（『通俗西湖佳話』）

原本の「滿座皆煖」を「一座アタヽカニシテ春ノ如シ」と、また「一室皆涼」を「座中スヾシウシテ秋ノ如シ」と訳している。春と秋を挿入することによって、四季を喩えとして使うような試みが見られる。また寒中に客を迎える時は暖かく、暑中に迎える時は涼しくすると対句表現にアレンジしている。訳者は、翻訳する際、白話表現を正確に捉えた上で、和文としての工夫を行っているといえよう。

四・二　付け加える翻訳

このほかにも、訳者は、底本そのままの言葉を用いると意味が伝わらない箇所を、自身の漢文知識をもって、説明を付け加えて翻訳している。一例を挙げれば、『西湖佳話』巻之二「断橋情蹟」の、文世高が紅粉売老婆に屋敷にどんな人が住んでいるかを尋ね、それに答える場面に「只生得一位小姐、名叫秀英、已是十八歳了、尚未喫茶」のセリフがある。それを『通俗西湖佳話』は「タヾ小

姐一人アリ、名ヲ秀英トテ、コトシ十八ナリ玉フガイマダ嫁モシ玉ハズ」と訳している。この「喫茶」という語は、『通俗編』[16]「儀節」の項に「按、俗語女子許嫁約喫茶、有一家女不喫両家茶之諺」と解している。『通俗西湖佳話』はこのように白話を理解して、日本語では「茶を飲む」の意で理解されかねないので、「嫁モシ玉ハズ」と正確に訳している。

このように訳者が白話知識を生かして、分かりやすく付け加えた工夫が見られる例を、以下に挙げる。

(1) 岳飛が生まれる時、母親の夢について紹介する場面（巻之三、一オ）

他姓岳単諱一個飛字、表字鵬擧。父母生他的時節、夢見一個金甲紅袍、身長丈餘的将軍。走進門来大聲道、我是漢朝張翼徳也。今暫到汝家。（『西湖佳話』）

岳飛字ハ鵬擧ソノ生レントスルトキ父母ノ夢ニクレナヰノ袍ニ金ノ鎧着タル大将一人外面ヨリ入来テ呼ツテ云ク我ハコレ蜀漢ノ張飛アサナハ翼徳ナリ今シバラク此家ニ到ルト云（『通俗西湖佳話』）

『西湖佳話』の「我是漢朝張翼徳也」に対して『通俗西湖佳話』は「我ハコレ蜀漢ノ張飛アサナハ翼徳ナリ」とする。底本をそのまま翻訳すると、「岳飛」の名の由来は分かりにくいが、「張翼徳」を「蜀漢ノ張飛アサナハ翼徳」に訳すことによって、岳飛の飛の字は親の夢に出てきた張飛（翼徳）の飛から取ったことが分かる。

(2) 世の時勢の説明（巻之三、二オ）

岳飛既長聞知二帝蒙塵不勝憤激（『西湖佳話』）

此トキ宋ノ哲宗徽宗ノ二帝共ニ北狄ノ金國ニトラワレ往玉ヒ猶其上ニモ折々宋國ヲ攻侵シケル岳飛此事ヲ深ク憤リテ…（『通俗西湖佳話』）

「二帝蒙塵」を「宋ノ哲宗徽宗ノ二帝共ニ北狄ノ金國ニトラワレ往玉ヒ猶其上ニモ折々宋國ヲ攻侵シケル」と状況の説明まで詳しく付け加えている。

(3) 岳飛が軍法に背いて斬罪に処せられそうになったが、留守使宗澤に助けられる場面（巻之三、二ウ）

忽探馬報金兀朮攻汜（『西湖佳話』）

忽探馬ハセ歸リテ金國ノ四太子兀朮攻メ来リテ（『通俗西湖佳話』）

「金兀朮」を訳す時、「金國ノ四太子兀朮」という説明を付け加えている。

(4) 蘇子瞻、子由兄弟の書を歐陽修に見せる場面（巻之四、一ウ）

歐陽修看了荐書、就看二人的文字、不禁拍案大叫道、筆挺韓筋、墨凝柳骨、后来文章当属此二人矣。張方平可謂擧薦得人。遂極力稱賛、直送與宰相韓琦去看。（『西湖佳話』）

當時文章ノ宗匠タル歐陽修アザナハ永叔蘇子瞻子由兄弟ノ書タル物ヲ見テ覺エズ案ヲハタト打テ後々世間ノ文章ハ此二人ニ留ベシト嘆美シテ時ノ宰相韓琦ノ方ニ送テ見セシム。

（『通俗西湖佳話』）

「歐陽修」を訳す際に「當時文章ノ宗匠タル」と字「永叔」を付け加えている。

（5）子由が兄の蘇東坡が王安石と衝突しがちであったことを心配する場面（巻之四、二ウ）

那時他兄弟那子由、同在京師做官、見哥哥屢次觸犯王安石、恐有大禍、甚是憂心。

（『西湖佳話』）

此時弟ノ子由モ同ジク京都ニテ做官テアリケルガ常々兄ノ正直ニシテ折々上ノ意ニ逆フヲ見テ行々如何ナル難儀ニカ及ブベキト心遣ヒシ居ケルガ

（『通俗西湖佳話』）

原文にはない兄の性格「正直にして」を付け加え、王安石と衝突する理由の一つを書き加えている。

（6）名妓朝雲の容姿を描く場面（巻之四、三ウ）

那時錢塘有個名妓、喚做朝雲、姿色甚美、而性情不似楊花

（『西湖佳話』）

ソノコロ錢唐ニ名タカキ傾城アリ名ヲ朝雲ト云甚美色ニシテ才藝アリ心バヘ尋常ナラズ

（『通俗西湖佳話』）

『西湖佳話』の美貌に加えて訳では「美色にして」「才藝あり」と「才色兼備」の妓女に訳している。

（7）蘇東坡が妓女の朝雲に戯れに言いかける場面（巻之四、三ウ）

東坡戯問道、既已四年、則朝為雲、暮為雨、只怕風塵中楽事、還勝似巫山

（『西湖佳話』）

東坡又戯トレテ云ヤウ汝ガ名ノ朝雲ハ朝ノ雲夕ノ雨ト云楚国巫山ノ故事ナリ、四年ノ間朝雲暮雨ノ楽ミハ巫山ニモ勝リツランカ

（『通俗西湖佳話』）

『通俗西湖佳話』は、妓女「朝雲」を楚国の「朝の雲、夕の雨」という「巫山の雲雨」という故事に喩えて、戯れることに説明を付け加えている。訳者は「朝雲暮雨」の故事を用いて、蘇東坡と妓女の戯れのやりとりをイメージし易く訳していることが分かる。

（8）佛印禅師と東坡が四大に就いて答話する場面（巻之四、七ウ～八オ）

東坡聽了、知是禅機、即隨口戯答道、既無處坐何不暫借和尚的四大身体用作禅床。佛印道、山僧有一句轉語、学士若答得来便罷。

（『西湖佳話』）

東坡佛印ノコトバハ禅機ノシカケルコトヲ知テ即座ニ戯レ答ヘケル坐スル所ナキハ是非モナシ和尚ノ四大ヲカシ玉ヘ床机ニセント云四大ハ地水火風ノ身体ヲ云ナリ佛印云ヤウ愚僧ニ一句ノ轉語アリ学士答ヘ得ランバ云分ナシ

（『通俗西湖佳話』）

『西湖佳話』の「和尚的四大身体用作禅床」を『通俗西湖佳話』では「四大身体」の説明を加えている。

以上の考察により、訳者はかなり白話に通じた人物であると言えよう。またその白話語彙を和文の体裁を整えるように工夫して翻訳しようとする姿勢が確認できる。

四・三　中国の単位を日本の単位に替えて翻訳

最後に中国の単位を日本の単位に換えて翻訳している例を列挙する。「数百歩」を「二三町」（巻之一）、「三百金」を「三百貫目」（巻之二）、「朔望」を「朔十五日」（巻之三）としている。他にも「未冠」を「年二十ニ足ラズ」、「三百觔」を「三百觔弦ヲ引所ノ目方也」（巻之三）と「三十里」を「三十里日本道六七里」（巻之四）と割注の形で補足説明を加え、銭「二萬」を「二十貫文」（巻之四）と翻訳している。

以上挙げた例のように、『通俗西湖佳話』は中国の単位を日本の単位に替えたり、中国の単位をそのままにして後で、日本の単位の注を付していることが分かる。しかもそれがかなり正確であることが注目される。

おわりに

『通俗西湖佳話』の訳者を考慮する際、翻訳態度の細部を通じて推測が可能であると考えられる。『通俗西湖佳話』の訳者はかなり白話に通じている人物であると考えたい。翻訳するにも作者の意識が加えられ、取捨選択を含め、作者の付け加え等様々な工夫が凝らされている。単純な書き下しではなく、原話を正確に理解した上で、日本的な型に創作されている。訳者の翻訳と原話の比較によって、訳者は白話語彙かなり正確に捉えた上で、和文にアレンジして訳そうとする翻訳姿勢が見られる。

通俗物に関しては、これまで徳田武氏等による典拠調査の研究[17]が主に行われてきたようであり、翻訳の仕方や白話語彙の使用等を含め、細部の研究はあまり行われていない。最近では特に中村綾氏の研究[18]が注目される。通俗物は白話小説の翻訳である以上、これらの細部まで目を通さないと通俗物の全体像が見えてこないと思われる。作者の翻訳を細部に至るまで、追跡、考察することは作者の創作過程を追うことである。通俗物は単なる翻訳だけでなく、翻訳でありながらも、作者の創作でもあると言えよう。

注

（1）『近世白話小説翻訳集』第五巻（汲古書院、一九八五年）。
（2）『舶載書目』（関西大学東西学術研究所、一九七二年）。
（3）中村幸彦「通俗物雑談―近世翻訳小説について―」（『中村幸彦著述集』第七巻、中央公論社、一九八四年）。
（4）注（1）前掲書による。
（5）注（1）前掲書所収、中村幸彦氏「解題」。
（6）丸山季夫「十時梅厓覚え書」（『国学者雑攷』吉川弘文館、一九八二年）。
（7）鶴田武良「名古屋市鶴舞中央図書館蔵十時梅厓書簡」上、下（『国華』1039・1040、一九八一年）。

(8) 橋爪節也「十時梅厓の研究」(『近世大坂画壇の調査研究Ⅱ』大阪市立博物館、一九九八年)。
(9) 大塚秀高『増補中国通俗小説書目』(汲古書院、一九八七年)
(10) 注(5)に同じ。
(11) 長尾直茂「前期通俗物小考」(『上智大学国文学論集』24、一九九一年)。
(12) 『通俗平妖伝』、『通俗醒世恒言』は、『近世白話小説翻訳集』第五巻、第四巻(汲古書院、一九八五年)所収の本文を引用した。
(13) 『醒世恒言』(古本小説集成 上海古籍出版社 一九九一年)。
(14) 『三遂平妖伝』(古本小説叢刊 中華書局 一九九一年)。
(15) 『新釈漢文大系』(明治書院、一九七五年)の解釈による。
(16) 翟灝撰『通俗編』(大化書局、一九九七年)。
(17) 徳田武『日本近世小説と中国小説』(青裳堂書店、一九八七年)、『近世近代小説と中国白話文学』(汲古書院、二〇〇四年)。
(18) 中村綾氏の論文に「『水滸伝』和刻本と通俗本—『忠義水滸伝』凡例と金聖歎本をめぐって」(『アジア遊学』131「『水滸伝』の衝撃」、勉誠出版 二〇一〇年)、「『太平記演義』における冠山の訳解態度をめぐって」(『江戸文学』38、二〇〇八年)、「和刻本『忠義水滸伝』と『通俗忠義水滸伝』—その依拠テキストをめぐって」(『近世文芸』86、二〇〇七年)、「『通俗皇明英烈伝』依拠テキストと冠山の訳解態度」(『汲古』53、二〇〇八年)、「『新鑑草』とその周辺」(『国語国文』837、二〇〇四年)などがある。

(きん・しょうてつ 本学大学院博士後期課程)